

E.A. ポーの詩における色彩の効果

伏原 玲子

On the Effects of Color in E.A.Poe's Poetry

Reiko FUSHIHARA

序

19世紀の偉大な詩人 E.A. ポーは、死に大きな関心を持ち、実際に彼の詩のなかに死に関連する内容を数多く発見する。ここでは、特に *The Raven*, *Annabel Lee*, *To Helen* [Whitman], *Lenore*, *For Annie*, *To One in Paradise* など女性に関わるポー独特の描写が織り込まれている数篇の詩を取り上げて、それらの中に用いられている色彩を通して、そのイメージと関連させながら作者のメッセージを探り出すことが目的である。

さらに、彼は現世を仮の住処としか考えておらず、常に安住の地を求めて詩の世界をさまよいつづけた。その結果、来世が彼には最高の楽園と思われ、実際に彼の周囲の人たちが次々と彼を置き去り、来世に行ってしまったために来世はポーの憧れの地となり、肉体の滅亡に恐怖を感じる事がなかった。特に女性に対しては、実母、養母、妻のヴァージニアとはこの世での縁が薄く、相次いで亡くしている。そのために、人一倍来世に対する憧憬が強かったのではないかと推測できる。彼の愛の対象となる女性は、母のような年長者から若妻のような年少者まで幅が広いのである。

E.A. ポーは詩の中で彼独自の世界を展開させ、彼の楽園の虚像ともいべきものを確立したのであった。特に、これらの詩の中には黒と白が多用されている。黒という色は、憂鬱、悪魔など、不吉なことを意味するケースが多い。白は、純粹、潔白、平和、靈魂など、黒とは対象的な意味合いを持っている。他の作品においても、有彩色は余り使用されず、白や黒などの無彩色が使用される頻度が圧倒的に高い。その理由を探りながら、彼の人生観を考察

本稿は関西英米文学会第45回（2002年12月26日）における発表に加筆したものである。

平成16年2月28日 原稿受理

大阪産業大学 教養部 非常勤講師

したい。

Poe had a great interest in the future life. He liked to use colored words in his poems at first, but he liked to use colorless words in them afterward. I'll take up six poems and search the vicissitude of Poe's mind.

In the first chapter, I'll analyze the psychological effects by using red, blue and violet in *The Raven*. In the second chapter, I'll analyze the psychological effects by using white and gray in *Annabel Lee*. In the third chapter, I'll analyze the psychological effects by using gold and silver in *To Helen* [Whitman]. In the fourth chapter, I'll analyze the psychological effects by using silver and yellow in *Lenore*. In the fifth chapter, I'll analyze the psychological effects by using red, white and violet in *For Annie*. In the sixth chapter, I'll analyze the psychological effects by using green in *To One in Paradise*. He adored in the future life because his mother and wife died when they were young. I think that he felt very lonely after they passed away. Therefore, there was very little hope of his living in this life.

As regards color, he used colorful words while he was happy. Later, however, he used colorless words while he was unhappy. Poe wanted to see his departed relatives again. Black means demon, melancholy and death. Moreover white means peace and soul. After all, using black and white color in his poetry, he wanted to express his desperation in this life.

I

まず、ポーの傑作である *The Raven* の第8連を取り上げてみよう。

Then this ebony bird beguiling my sad fancy into smiling,
By the grave and stern decorum of the countenance it wore,
"Though thy crest be shorn and shaven, thou," I said, "art sure no craven,
Ghastly grim and ancient Raven wandering from the Nightly shore-
Tell me what thy lordly name is on the Night's Plutonian shore!"
Quoth the Raven "Nevermore."¹⁾

1) Poe; Poetry and Tales (New York: The Library of America, 1984), p.83. Poe の作品からの引用はすべてこの The Library of America 版に拠る。以下、各引用文の後に頁数を記す。

その時真っ黒なこの鳥は、きびしくおごそかな顔をして
私の悲しい思いをまぎらわし、微笑ませてくれた。
「お前のとさかは剃られているが」私は言った、「夜の岸から迷い出た
臆病者の薄気味悪い老いぼれた鴉ではなかるうー
一体、おまえはあの闇の国では何と呼ばれたのか！」
大鴉は答えた、「もはやない」

1行目に *ebony* とあるが、この黒はタイトルの *The Raven* の黒と重なり合っている。黒は、怒りや嫌悪に満ちた感情と、さらに心配や死を象徴する²⁾。この行で黒を2つ使用することで作者は自分より先だった恋人レノーアに対する淋しさを作り出し、持って行きようのない気持ちを切々と訴えかけている。ポーにとって、死は憧れであり、自分の身近にいた愛する人々が消えてしまった未知の世界でもある。まだ見ぬ世界でありながら、孤独なポーは詩の中において彼女等と自由な会話を楽しみつつ、彼女等のいない空虚な現実に戻される。黒という不気味な色彩を用いることによって、ポーの寂しい気持ちが象徴的に描かれている。

次は、第13連を考察しよう。

This I sat engaged in guessing, but no syllable expressing
To the fowl whose fiery eyes now burned into my bosom's core;
This and more I sat divining, with my head at ease reclining
On the cushion's velvet lining that the lamp-light gloated o'er,
But whose velvet-violet lining with the lamp-light gloating o'er,
She shall press, ah, nevermore! (84)

こうして私は椅子にもたれて この鳥に一言も洩らさず 推量にふけた。
鳥の火のような眼が私の胸に燃え上がった。
私は座り、頭をゆっくりランプの灯の微笑むクッションに
もたれ、その意味を押し量った。
しかし、ランプの灯が微笑みかけるスマイレ色のピロードに
レノーアがもたれることは 「もはやない！」

2) 千々岩英影, 『色彩学概説』(東京大学出版会, 2002) p.180

2行目に fiery とあるが、これは赤い色を意味している。赤色は、愛、熱情、怒り、さらに落ち着かない心情を象徴する色である³⁾。つまり、今は亡きレノーアとの過去の熱情を懐かしみつつ、彼女の存在の大きさを認識させることにもなっている。しかし、この色は、一方では情緒を不安定にさせる色でもあり、時間経過を遅く感じさせる心理的作用もある。彼女の不在を埋める新たな女性がまだ出現せず、大きな穴のあいた心の空虚さを解消できないつらい気持ちを表現している。

さらに、5行目に violet が使用されている。紫色は、不幸、涙、悲しみ、また情緒不安定などを象徴する色である⁴⁾。赤と紫には、情緒不安定という共通点が見られる。これは、どちらも最愛の恋人を亡くした後の混乱した精神を示し、過去に彼女が座ったクッションでさえも彼女のことを考えずには座れない。家中のどこもかしこも彼女の思い出で満たされている。そのために忘れようとしても、頭の中から彼女の姿を抹殺することができず、イライラした気持ちを隠すことができないのだ。作者は、情が深く、過去を封印して前向きで新たな人生を送ることが困難であることに苦しんでいる。その様子が黒、赤、紫色を多用することで見事に表象されている。

次は、最終連に注目しよう。

And the Raven, never flitting, still is sitting, *still* is sitting
On the pallid bust of Pallas just above my chamber door;
And his eyes have all the seeming of a demon's that is dreaming,
And the lamp-light o'er him steaming throws his shadow on the floor;
And my soul from out that shadow that lies floating on the floor
Shall be lifted — nevermore! (86)

そして大鴉は羽ばたかず、止まっている、なおも止まったままだ。
私の部屋の戸の真上の色蒼ざめたパラスの胸像の上に
その両眼は夢を見ている悪魔の姿のように
ランプの灯は鴉の影を床に落とし
床に漂うその影から私の魂が
逃れることは一もはやない！

3) Deborah T. sharpe, 千々岩英彰訳 『色彩の力—色の深層心理と応用』(福村出版, 1999) p.123

4) 千々岩英彰, 『色彩学』(福村出版, 1998) p.147

2行目に pallid とあるが、これは青ざめている色を意味している。青は、調和、献身、責任、平静などを象徴すると同時に非現実的で計画性を欠く色でもある。また、精神を沈静化させ、安定させる心理的作用もある。ここでは、恋人の姿と大鴉とをオーバーラップさせて、十分に彼女に対して愛情を捧げ尽くして今は一刻も早く忘れ去り、平穩に暮らしたいという願望が満ち溢れている。しかし、その気持ちとは裏腹に作者の気持ちをまるで攪乱するかのよう大鴉が彼の周辺に出没しては、過去に引き戻そうとする。作者は、大鴉の姿をした昔の恋人に対して、自分のことはもう忘れて欲しいと願いつつ、彼女を記憶の彼方に葬ることのできない自分自身を発見してジレンマに陥るのである。

大鴉の存在が、最終連において、作者の胸にあまりにも大きく入り込んだまま消失しないという事実が明確に述べられている。1連から17連までは輪郭のみが表現されていたが、最終連で、何度も繰り返して用いられている nevermore という言葉が特に重大な意味を持つことが認識される。つまり、大鴉は昔の恋人レノアであり、彼女が作者の所に戻ってくることは決してないということが明言されていて、結果的には叶うこともない悲恋に終わったのである。

E.A. ポーがこの詩の中で黒という色をメインに用いて、鴉という不気味な鳥を登場させたのも彼が二度と会えない恋人と唯一再会を果たせる場所として来世を想定しているからである。そのために詩全体が暗いムードに包まれ、死を身近に感じさせる心理的効果を生みだしていると考えられる。

II

次に、彼の最後の詩、バラード（物語体）の *Annabel Lee* を調べてみよう。

It was many and many a year ago,
In a kingdom by the sea,
That a maiden there lived whom you may know
By the name of Annabel Lee; —
And this maiden she lived with no other thought
Than to love and be loved by me.

海のほとりのある王国に
今は多くの年を経た
1人の少女が住んでいてその名を

アナベル・リーと呼ばれていた。
そしてこの少女、心の想いはただ私を愛し、
この私に愛されること。

*She was a child and I was a child,
In this kingdom by the sea,
But we loved with a love that was more than love —
I and my Annabel Lee —
With a love that the wingèd seraphs of Heaven
Coveted her and me.*

この海辺の王国で、
ほくと彼女は子供のように生きていた。
それでも私たちは愛し合った、愛よりももっと大きな愛で。
私とアナベル・リーとは
天に住む翼の生えたセラフたちも私たちから
盗みたくなるほどの愛をもって。

*And this was the reason that, long ago,
In this kingdom by the sea,
A wind blew out of a cloud by night
Chilling my Annabel Lee;
So that her highborn kinsmen came
And bore her away from me,
To shut her up, in a sepulchre
In this kingdom by the sea.(102)*

そしてこれがそのわけだった、遠い昔、
海のほとりのこの王国で、
雲間を吹き下ろす一陣の風が夜の間に
アナベル・リーを凍らせたのは。
そのために身分高き彼女一族が駆けつけて

彼女を私から連れ去った、
彼女を墓に閉じこめるために、
海のほとりのこの王国で。

まず、第1連の2行目の sea は青を示している。青ざめた色は、大鴉で用いられたが、この青色は献身、男友達、人を救済したい気持ちを象徴している。第3連の身分の高い親戚が彼女を引き裂き、連れ去ったとあるように作者は、この事態を何とか阻止したかったという気持ちを持っていたと考えられる。愛し合う二人が、お互いの意志に反して周囲の人間により引き裂かれ、さらに最愛の恋人がこの世には存在しないという悲しみの心情が切々と語られている。

さらに、第2連の5行目の wingèd seraphs と第3連の3行目の cloud はどちらも白を示している。白は、純粹、潔白、神聖、靈魂、孤独、平和を象徴する色である。また、作者の愛する、本来ならば未来の花嫁になるべきアナベル・リーが着用するはずのウエディングドレスの色、さらに乙女を象徴する純潔の色とリンクする。

第3連の7行目の sepulchre は、文語的表現の墓や埋葬所のことで普通は、tomb, grave が用いられる。墓の色は、灰色であり落胆、過去、悲しみ、孤独、不幸、苦難、無気力などを象徴している。これらの指し示すすべてが、この時の作者の胸中を代弁していると考えても不自然ではないと思われる。どれほどこの世で愛し合っていたとしても、その恋人に先立たれ二度と会えないという深い悲しみは、癒すことができないほど作者のその後の人生に尾を引いている。現世に生きてはいるものの、彼は最早現世に未練がなく、恋人が待つ来世への憧れとなって大きく期待をふくらませるのである。それほど、彼には来世は地上の樂園ともいうべき、現世には見あたらない最上の土地という観念がある。その理由の一つには、彼の身近な愛する人がいつも未知の来世に去ってしまい、彼が一人現世に取り残されるという現実があったからだ。そのために、来世に異常といってもいいほどの執着をポーが示したとしても何の不思議もない。彼の望みは、素晴らしい日々を、愛する人ともう一度分かち合い、幸せに暮らしたいというささやかなものなのである。

名前は異なるが、この詩は3年前に死去した愛妻ヴァージニアに捧げるものであり、ポーにとっては、彼女の肉体が消滅しても霊が強い絆で結ばれていると確信をしていることが窺われる。

III

次に、*To Helen* [Whitman] を考察しよう。

I saw thee once — once only — years ago:
I must not say *how* many — but *not* many.
It was a July midnight; and from out
A full-orbed moon, that, like thine own soul, soaring,
Sought a precipitate pathway up through heaven,
There fell a silvery-silken veil of light,
With quietude, and sultriness, and slumber,
Upon the upturn'd faces of a thousand
Roses that grew in an enchanted garden,
Where no wind dared to stir, unless on tiptoe —
Fell on the upturn'd faces of these roses
That gave out, in return for the love-light,
Their odorous souls in an ecstatic death —
Fell on the upturn'd faces of these roses
That smiled and died in this parterre, enchanted
By thee, and by the poetry of thy presence.

あなたを見た、一度、ただ一度、幾年も前のこと
幾年も前とは—それほど以前ではなく—
それは7月の真夜中だった。まるであなたの魂のように
舞い上がり 天空高く
ひとすじに空をよぎろうとする満月から
銀色の絹のような光のベールが落ちていた、
おだやかに、そして蒸し暑く、そしてまどろむように、
魔法にかけられた庭園に伸びた幾千の
薔薇の仰向いた一つ一つの顔の上に、
つま先立ちで歩かぬ限り、そこには薔薇のそよぎもない
落ちていた、愛の光のそのお返しにと
恍惚の死のなかに薫り高い魂を発散する
これらの薔薇の仰向いた顔の上に
落ちていた、あなたのため、あなたの存在の詩のために
魔法にかけられて、この花壇に微笑みそして死んで行く

これらの薔薇の仰向いた顔の上に。

Clad all in white, upon a violet bank
I saw thee half reclining; while the moon
Fell on the upturn'd faces of the roses,
And on thine own, upturn'd — alas, in sorrow!(95)

白づくめの服をまとい、スマイレの咲く堤の上に、
私はあなたが半ば身を横たえているのを見た。月光は
落ちていた、仰向いた薔薇の顔の上に、
そして、あなた自身の顔の上に、仰向いた ああ、悲しみのために！

まず、第1連の6行目に silvery とあり、第2連の2行目に moon とある。silvery は銀で moon は金であり、純粹、完全、最高などを象徴している⁵⁾。無彩色と有彩色に比較すると金は、黄色と同じで有彩色に分類され、銀という色は、灰色と同じで無彩色に分類される。国によって多少は異なるものの、欧米においても金銀は、他の色と比較して特別扱いされることが多い。例えば王冠の色や、婚約指輪や結婚指輪の色としてまた、クリスマスツリーのデコレーションの色として用いられていることから考えても納得できる。

2連の1行目に白があるが、先ほど述べた Annabel Lee でも用いられていたので省略する。その他に、2連の1行目に紫色があり、これは不幸、涙、悲しみ、心配、夕暮れ、靈魂を象徴する色である。さらに、葬式などの崇敬さとも関係があると言われている。この詩のタイトルでもあるヘレンは、当時有名な女流詩人セアラ・ヘレン・ホイットマンであり、ポーが36歳だったのに対して彼女は少し年上であった。この詩を作るきっかけとなったのは、彼が愛妻を亡くした後の寂しい気持ちを秘めて、偶然散歩の途中にセアラを彼女の家の前で見かける。それ以来彼女への思いが募る一方で、ついにプロポーズまでしたというエピソードがある⁶⁾。彼女は、自分の財産をポーに譲らないという条件付きで結婚を承諾している。しかし、実際は、ポーが婚約を破棄し、結婚には至らなかった。その理由の一つには、ポーには、もっと愛する女性の存在があり、その気持ちを偽ることができなかったからである。その上、彼女は夫がいる身で、その恋が叶うという望みは露ほどもなかった。悲しみが、まるで愛す

5) 佐藤勝一・杉山朗子他共著 『色感素養—カラー&イメージトレーニング100のポイント』
(ダヴィド社、1999) pp.108~109

6) 加島祥造編 『ポー詩集』(岩波書店、1997) p.178

る人を失ったかのごとくに描かれている。

最終連では、愛するヘレンが永遠の女神の Dian として置き換えられて、Elysian は、ギリシャ神話で善人が死後に住む所である。この詩においてもポーの恋愛は、相手の昇天という形をとって幕を閉じることとなる。彼の愛する人は、彼の期待を裏切り、いつも現世で恋を成就させることなく一人で来世へと旅立ってしまう。彼がどのような言葉をかけようとも相手には届かず、彼の思いは募るばかりである。しかし、成就されなかった恋愛のために彼の天国に寄せる期待も人並み以上のものとなり、彼の胸の中では死そのものが単なる肉体の消滅を意味するだけで魂の消滅とは捉えられてはいなかったと考えられる。大鴉との相違点は、この詩において黒が用いられていないことである。その理由として考えられるのは、ポーと女性との関わりの度合いが異なることからではないかと想像できる。ヘレンは、すでに名声も得ていたことから、彼にとっては、手の届かない大きな存在であり、ヴァージニアは年下で彼との思い出も共有した愛妻で、傷つく度合いも大きかったのではなかろうか。ゆえに、この詩は彼の内面のいらいらや陰鬱な様子があまり感じられないほど淡々と述べられている。

IV

次に、*Lenore* を取り上げてみよう。

Ah, broken is the golden bowl! — the spirit flown forever!
Let the bell toll! — a saintly soul floats on the Stygian river: —
And, Guy De Vere, hast *thou* no tear? — weep now or never more!
See! on you drear and rigid bier low lies thy love, Lenore!
Come, let the burial rite be read — the funeral song be sung! —
An anthem for the queenliest dead that ever died so young —
A dirge for her the doubly dead in that she died so young.(68)

ああ黄金の杯は砕け散った！ 酒は永遠に流れ去った！
弔いの鐘よ鳴れ！ 聖なる魂は地獄の河を流れ漂う、
そして汝ガイ・デ・ヴィアよ、涙も流さないのか？ 今泣かねば、今後決して
泣くことはなかろう。
見よ！あの恐ろしく固い棺に君の愛するレノーアが眠る！
さあ、弔いの言葉を読み — 慰めの歌を口ずさもう！

あまりに若くして亡くなった最も高貴な死者のために。

あまりに若くして亡くなったため一層悲しみを誘う彼女を送る歌を。

第1連の1行目に golden が使用されている。葬儀を行う牧師の語り口と解釈でき、これは聖書(伝道の書12章6節)にも同じ言葉が見られる。この色も前出の *To Helen* [Whitman] にも使用されていたが、この詩では冠婚ではなく葬祭の方で用いられている。また、このレノーアという乙女の過ぎ去りし日々、最も幸せで光り輝いていた人生の一時期をも指しているのではないかと思われる。つまり、結婚(人生の絶頂期)を目の前にしてその幸せを手に入れることのできなかつた悔恨の気持ちとも受け取れる。このレノーアと大鴉で登場したレノーアとは同一人物である。ここでは、婚約者が彼女の死を悼むという設定で作者は当事者ではなく、第三者的役割を担っている。

次に、第3連を調べてみよう。

Peccavimus : — yet rave not thus! but let a Sabbath song
Go up to God so solemnly the dead may feel no wrong!
The sweet Lenore hath gone before, with Hope that flew beside,
Leaving thee wild for the dear child that should have been thy bride —
For her, the fair and debonair, that now so lowly lies,
The life upon her yellow hair, but not within her eyes —
The life there upon her hair, the death upon her eyes. (69)

我ら罪を犯せり。しかしそれをとがめるな!

死者が罪を感じることはないように、安らぎのための歌を神のもとへ届けよう!

やさしいレノーアはその傍らを行き交った希望と共に神のもとへ旅立った、

君の花嫁になるはずだった君のハートを虜にした彼女は君を残して去った。

彼女のための悲しみに うるわしく気高い彼女、今は哀れに横たわる、

命は今も彼女の黄色い髪の上にある、しかし彼女の眼にはなく

命は今のそこに、彼女の髪の上に、死は彼女の眼の上に。

8行目に黄色が用いられている。黄色は、嫉妬、嫌悪、権力欲、野心などを象徴し、原始的な本能を刺激して危険を感じさせ、注意を感じさせるという心理作用がある。このことから、若くして亡くなったレノーアの周囲に存在した人々に対する恨みを表現していると判断でき

る。というのも、誰もが彼女の家柄、富を嫉妬して彼女本来の人間性を認めて近づいたのではないということが述べられているからである。それに対する作者の怒りに満ちた気持ちをも表現しているものと捉えられる。特にこの黄色は、第1連で出てきた金色と同様の意味でここではレノーアの金髪を意味している。大鴉の作者の心情よりも、視点を変えて描いているために同じ女性だとは思えないほど淡々と落ち着いた様子で締めくくられている。しかし、レノーアを実在の女性だとは特定できない。その根拠は、この詩はポー22歳の1831年の時に書かれ、その後11年後に書き直され、さらに、彼の亡くなる1849年まで手直しされていたからである。つまり、18年間という期間に書き続けてきたことから彼の胸の中での理想の女性像と見なしたほうが自然であろう。

V

次に、*For Annie* の第9・10連を考察してみよう。

My tantalized spirit
Here blandly reposes,
Forgetting, or never
Regretting its roses —
Its old agitations
Of myrtles and roses:

タンタクロスのように渴きに喘いだ私の魂も、
ここではさわやかに安らいでいる
薔薇の花のことも
その昔のマートルや薔薇のそよぎも、
忘れてそれを悔やむことも
絶えてなく。

For now, while so quietly
Lying, it fancies
A holier odor
About it, of pansies —
A rosemary odor,

Commingled with pansies —

With rue and the beautiful

Puritan pansies. (99)

それというのも今こうして静かに横たわって

私の魂はさらに神聖な

パンジーの香りが身を取りまくのを

夢みているからだ。

美しく清らかなパンジーや

悔いに混じった

ローズマリーの香りが身を取りまくのを

夢みているからだ。

このタイトルのアニーは、ナンシー・リッチモンド夫人のことで、深く愛し、彼女には夫がいたにもかかわらず、手紙の交換によってプラトニックラブを貫いたものとされている。愛妻亡き後のポーが、最も愛した女性であるとも言われている。

まず、第9連の4行目の roses は、一般には情熱の赤色を指していると思われる。赤色は、生命力、エネルギー、情熱、興奮、衝動的、貪欲、神経過敏などを象徴する。さらに、心理的作用としては、愛情、優しさ、温もりを感じさせ、心を和ませる。また、覚醒、興奮状態を作り出す効果がある。この詩の内容は、一見愛する女性の死を悼むようにとれるが、実際は、死線をさまよった後に、現世に戻ったきた人と考えた方が自然である。つまり、赤色を使用することにより、まさにこの蘇った生命を表現していると考えた方が理解しやすいのではないか。

また、6行目の myrtles は、常緑低木で白い花を咲かせることから、白色だと判断できる。白は、既出であるが、この詩の中に限って考えると、真実、失敗、孤独、来世などの象徴と見なされる。まさに、この主人公の女性が三途の川を渡りかけた事実がこの白が来世を示すことと符号する⁷⁾。

さらに、第10連の4行目の pansies と 5行目の rosemary はどちらも紫色の花を咲かせる。紫も既出 (*To Helen* [Whitman]) であるが、この詩での意味を考えると、神聖、尊厳、情緒不安定、うぬぼれ、上品を象徴している。そして、人体内の光回復酵素を刺激し、活動力

7) 神庭信幸・小林忠雄他共著 『色彩から歴史を読む—モノに潜む表現・技術・認識』(ダイヤモンド社、1999) pp.230~231

を上昇させ治癒効果をもっていたり、不安とストレスを促進させるというプラスとマイナスの両方の心理的作用がある。プラス面の方は、彼女が死の床から蘇ったことで説明がつく。一方マイナス面の方は、ポーは心の底から深い愛情を注いだが、彼女が既婚者ということから彼の果てしなく深い苦悩を表し、彼女との関係が暗礁に乗り上げていることも推測できる。次は、第15連を調べてみよう。

But my heart it is brighter
Than all of the many
Stars in the sky,
For it sparkles with Annie —
It glows with the light
Of the love of my Annie —
With the thought of the light
Of the eyes of my Annie. (100)

だが私の心は天国の
幾多の星をことごとく合わせたよりも
もっともっと輝いているのだ。
アニーと一緒に煌めいているのだ
私とアニーの愛の光で
あかあかと燃えているのだ
私のアニーの眼の光を思って
あかあかと燃えているのだ。

3行目の空は、青色であり、平和、自制心、孤独、悲しみ、爽やかさを象徴している。さらに、精神を沈静化させたり、安定化させる心理的作用があったり、内分泌系の働きを鎮静させる生理作用がある。この詩における青の役割は、現世においてはポーとこの女性（リッチモンド夫人）とは結ばれる可能性が全くない。肉体消滅後、彼等の靈魂が来世で結合する以外に手段は見つからない。一度、現実離れた理想をかなぐり捨てると、ポー自身も精神的に楽になり、爽やかな平和な気分になったと思われる。

VI

最後に、*To One in Paradise* の第1連を調べてみよう。

Thou wast that all to me, love,
For which my soul did pine —
A green isle in the sea, love,
A fountain and a shrine,
All wreathed with fairy fruits and flowers,
And all the flowers were mine. (69)

愛する人よ あなたは私のすべて
あなたこそ我が魂の憧れ—
愛する人よ あなたは海原に浮かぶ緑の島
そして泉と神殿,
すべては優美な果実と花で飾られ,
花はすべて私のものです。

3行目に緑色が使用されている。緑は落ち着き、くつろぎ、平和、安息、慰安、公平、親愛などを象徴し、緊張緩和やストレスの減少という生理作用もある。この詩は、ポーの青年期に書かれたために Thou を特定の女性としては断定できない。恋歌ではあるが、実像の女性をモデルにしていない事から今まで取り上げた詩と比較すると、作者の心情を反響させた衝撃的な内容ではなく、歌詞の一部分を聞いているように軽く歌われている。つまり、この時期のポーは、恋愛経験もまだ豊富ではなく、花に例えると蕾のような状態であると考えられる。そのために、彼の心理状態もいたって平和であり、大きな悩みもなく安定した時期であったのだ。

結び

6篇の詩を取り上げて、それぞれを色彩と結びつけて考察した結果、赤、紫、青、黄、緑などの有彩色は愛妻の存命中の作品、*Lenore*, *The Raven*, *To One in Paradise* に多少は使用されている。しかし、愛妻亡き後の作品、*To Helen* [Whitman], *For Annie*, *Annabel Lee* には圧倒的に黒、白、灰色などの無彩色が多く使用されていると思われる。これは、作

者ポーの心理状態を直接的に表現しているものであり、特に愛妻の死後は、孤独や憂鬱と戦いながら、貧しさ故に彼女に十分な生活を送らせることができなかつた悔恨と共に彼女の面影を求め続けていたからであった。しかし、現実には、現世で彼女と再会するのは不可能であるために、彼は来世でなら彼女と再会できると考え、そのために来世こそ理想の楽園であると考えてしまう。その彼の心情が無彩色の持つイメージと重なり合つて、暗くて不気味な状況を醸し出しているのである。

妻の死後、数々の女性との浮き名を流したポーであるが、彼は女性の持つ美しさ、やさしさなど表面的なことに興味を抱いていた。つまり、彼の愛とは精神的な愛を指し、そのために彼を愛する女性のある者は彼についていけず、去っていった者もいると言われている⁸⁾。幼少の頃の友人の母のやさしい面影や、愛妻や、その後のヘレン・ホイットマンやリッチモンド夫人などポーの周囲には多くの女性が登場した。その中で、最も彼が愛情を捧げたリッチモンド夫人のイメージは、永遠の乙女であり、天使でもあった。これは、白のもつイメージそのものである。ポーとリッチモンド夫人は、生涯結婚という形式をとることはなかつたが、彼等の魂は、強固に結びつき彼の理想の地である来世で結ばれたことであろう。

また、この3つの無彩色には、光の媒体によってそれらをすべて吸収すると黒になり、逆に反射すると白になり、黒と白を混合すると灰色になる。このことから、黒という色はほんの少しの変化で白になり、その逆もありうると言えよう。天国と地獄とが紙一重であると考えれば、黒と白も同様に考えられる。青年期のポーには、来世が心のよりどころであるという感情はなく、歳を重ねて恋愛経験も豊富になるにつれて来世に救いを求めるようになったのである。これは、初期の詩には有彩色が用いられていたのに反し、晩年の作品に近づくとつて黒、白、灰色などの無彩色の使用が目立つことからでも認識されるのではないだろうか。

つまり、来世に旅立つ愛する女性を目の当たりにして、ポーはどれほど来世に憧れ、彼自身もそこに幸せがあると確信していたかが詩のあちらこちらから読みとれる。彼の来世に対する憧憬は、それだけにおさまらず、現世での人生が不幸であったために死後の世界が楽園であり、幸福を得られるという希望を見出したのである。

8) 野村章恒 『E・アラン・ポオ』(金剛出版, 1979) p.204